

Title	レッシングとゲッツェの論争 : その最初の鏝ぜり合い
Author(s)	安酸, 敏眞
Citation	聖学院大学論叢, 6: 179-192
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=703
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

レッシングとゲッツェの論争

—その最初の鏢ぜり合い—

安 酸 敏 眞

The Controversy between Lessing and Goeze

— The First Phase of Their Face-to-Face Confrontation —

Toshimasa YASUKATA

From 1774 onward G. E. Lessing, as librarian of the famous Herzog August Bibliothek at Wolfenbüttel, published a series of manuscripts and other holdings which he had discovered in the Library. Among them were the *Fragmente eines Ungenannten*. The publication of these fragments aroused a heated controversy because of the unusually critical ideas contained in them. Many theologians and clergymen hysterically responded with severe attacks on the unnamed author. But J. M. Goeze, who was reviled as “the Papst Hammoniens” or “der Inquisitor”, reproached not so much the unnamed author as the editor of the fragments for the circulation of blasphemous ideas. Lessing bravely counterattacked the inquisitor. Hence the face-to-face confrontation between Lessing and Goeze.

The purpose of this study is to examine the first phase of the controversy with the aim of shedding light on the real motive of Lessing and Goeze.

1. 論争の発端とその経過

一七七〇年五月、ゴットホルト・エフライム・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781)⁽¹⁾は、長い遍歴流浪の人生に終止符を打って、ブラウンシュヴァイク大公国内のヴォルフエンビュッテルにあるヘルツォーク・アウグスト図書館の司書に就任した。そして一七七二年二月、宗教を攻撃しないという条件つきでブラウンシュヴァイク大公から検閲免除の特権を取りつけ、ヴォルフエンビュッテル図書館に埋もれている貴重な文献を『歴史と文学のために——ヴォルフエンビュッテル大公図書館の貴重な文献より』(通称『ヴォルフエンビュッテル論集』)として順次刊行しだした。ところが一七七四年その第三輯第十八号に、本来ヴォルフエンビュッテル図書館に所

Key words; Lessing, Goeze, Fragmentenstreit, the Enlightenment, 18th Century Protestant Thought

蔵されていたのではなく、ハンブルク時代に知己を得て親交を深めるようになったライマールス兄妹から秘かに手渡された、彼らの亡父ヘルマン・ザムエル・ライマールス (Hermann Samuel Reimarus, 1694-1768) の遺稿⁽²⁾の一部 (ライマールスの遺稿のなかでは内容的に最も穏健な部分) を、当地の図書館に埋もれていた文献であるかのように見せ掛けて、——しかも念入りにこの著者は禁書処分になった「ヴェルトハイムの聖書」の翻訳者ヨーハン・ローレンツ・シュミット (Johann Lorenz Schmidt, 1702-1749) ではないかとの偽りの推測まで添えて——、『理神論者の寛容について——無名氏の断片』 *Von Duldung der Deisten: Fragment eines Ungenannten* と題してまず刊行した。(おそらくそこには、まず差し障りのない部分を出版して既成事実を作り、しかる後に著者の真骨頂ともいうべききわめて過激な合理主義的思想が反映されている部分を公表するという、レッシング一流の計算が働いていたと考えてよいであろう。) いずれにせよ、最初の断片はさしたる反響を呼ばずに終わった。そこでレッシングは、いよいよ三年後の一七七七年その第四輯第二十二号に、今度は「説教壇で理性を誹謗することについて」、「すべての人が根拠ある仕方信仰する啓示の可能性」、「イスラエル人たちの紅海徒渉」、「旧約聖書の諸書は宗教を啓示するために書かれたのではない」、「復活物語について」、というきわめて過激な五篇の断片からなる『無名氏の草稿から啓示に関する更にいくつかの断片』 *Ein Mehreres aus den Papieren des Ungenannten, die Offenbarung betreffend* を公刊した。すると今度は彼の思惑通り、各方面から、とりわけルター派正統主義の陣営から、猛烈な非難の声が上がり、ここに所謂「断片論争」(Fragmentenstreit) の幕が切れて落とされる⁽³⁾。

この「断片論争」は、やがて「ハンブルクの異端審問官」の異名をとるハンブルクのカタリーナ教会の主席牧師、ヨーハン・メルヒオル・ゲッツェ (Johann Melchior Goeze, 1717-1786)⁽⁴⁾の登場によって新しい局面をむかえ、その後はもっぱらレッシングとゲッツェという二人の主演の間での、プロテスタント史上まれに見る熾烈な論争へと発展する。ゲッツェは、『無名氏の断片』の所説そのものを反駁することに終始していたこれまでの論客たちと違い、最初からその鋭い批判の矛先を『断片』の刊行者たるレッシングその人に向けてきた。『無名氏の断片』をキリスト教に対する「敵意にみちた冒瀆」以外の何物でもないと見なす彼にとって、このような書物を公にしたレッシングは、「キリスト教世界全体に面と向かって嘲りの言葉を発した」⁽⁵⁾容赦ならぬ人物であり、『断片』が「異常分娩 (奇形児)」(Misgeburth) であったとすれば、レッシングがそれに添付した「刊行者の反対命題」(Gegensätze) は「断片の中に含まれている毒自体よりもいっそう有毒なもの」(noch giftiger war, als das in dem Fragmente befindliche Gift selbst) であった⁽⁶⁾。

ルター派正統主義の代弁者を自認し、その使命感から数々の「異端審問」を手がけてきたゲッツェは、今回も『宮廷顧問官レッシング氏がわれわれの至聖なる宗教に加えた間接的・直接的な攻撃に対する暫定的反駁』 *Etwas Vorläufiges gegen des Herrn Hofrats Lessing* と、『レッシングの弱点』 *Lessings Schwächen* という、はなはだ毒々しい二冊の書物を執筆してレッシングを打ちのめしにか

かった。しかし、レッシングもこれに負けじと応酬して、『譬話』 *Eine Parabel*, 『公理』 *Axiomata*, 十一篇からなる『反ゲッツェ論』 *Anti-Goeze*, 『ゲッツェ氏の非常に不必要な問いに対するレッシングの必要な答え』(正・続) *Nötige Antwort auf eine sehr unnötige Frage des Herrn Hauptpastor Goeze* といった論争文書を次々に世に送り出した。更には、その間にライマールスの遺稿中一番過激な部分を、『イエスと彼の弟子たちの目的について』 *Von dem Zwecke Jesu und seiner Jünger* と題して公刊して、攻めに転じた。二人の間の論争は、個人的憎悪と怨念も手伝って、かつて例を見ないほどの泥試合の様相を呈したが、旗色悪しとみたゲッツェは、ブラウンシュヴァイク大公に働きかけて、レッシングがそれまで有していた検閲免除の特権を剥奪せしめた。かくして一七七八年七月、レッシングが宗教に関して書くものは悉く検閲下に置かれるようになり、翌八月にはブラウンシュヴァイク政府の許可なしにはいかなる書物も出版できなくなった。

しかし、そこは「真理の愛好者」にして「策略の名手」たるレッシングのこと、ブラウンシュヴァイク大公国内で「反ゲッツェ論争」をそれ以上続行することができなくなると見るや、「わたしのかつての説教壇」⁽⁷⁾と彼が言うところの「劇場」の世界に舞い戻って、「今のわたしのもめごととある種の類似性をもっている劇」⁽⁸⁾の創作を企てる。かくして誕生するが、後世にレッシングの名を不朽にする戯曲『賢者ナータン』 *Nathan der Weise* である。これこそは実に、レッシング自身の言葉も借りて言うならば、「(ゲッツェとの) 論争が産婆役になって生まれた、迫りくる老年の息子」(ein Sohn seines eintretenden Alters, den die Polemik entbinden helfen)⁽⁹⁾であった。

以上が、「断片論争の《第二部》」⁽¹⁰⁾ともいふべき、レッシングとゲッツェの論争の外的経過のあらましであるが、この論争の神学的分析に入る前に、是非とも考察しておかなければならないいくつかの事柄がある。まずはレッシングとゲッツェの個人的関係についてである。実はこの二人は、「無名氏の断片」を媒介にしてはじめて対面するのではなく、それに先立つ約八年前に、すでにハンブルクで旧知の間柄になっている。レッシングの書き残した資料には、「一七六九年一月二十四日、わたしは牧師団議長ゲッツェ氏とはじめて個人的に知り合いになる。わたしは彼の再三の招待に応じて彼を訪問したのであるが、わたしは彼において、その振舞いにおいては非常に自然な、そしてその知識という点ではなかなかの人物を見いだした。われわれは当地の公共図書館についてきわめて真剣に語り合った」⁽¹¹⁾、と記されている。その際二人の間では、当時のハンブルクの図書館の憂うべき現状や、ゲッツェが所有している聖書の素晴らしいコレクションのことなどに関して、知的に興味深い会話が交わされた。そのため、レッシングのゲッツェ宅訪問は、一度かぎりの単なる儀礼的訪問に終わらず、彼はゲッツェのもとに数度足を運んでいる。レッシングの弟カールの証言に暫し耳を傾けてみるとしよう。

「当時の牧師団議長、ないしバールト的理性に基づく宗教的用語によれば、ハンブルクの正統信仰集団の大ボスたるゲッツェは、レッシングによって数回の訪問を受けた。その訪問の際、もちろん彼らは新旧約聖書の正典や、ハンブルクの新旧の劇場の価値を確定したりはしなかったが、しか

し他のいろいろな学問的な事柄について語り合った。いかんせんレッシングに教会の贖罪規定を課す力を持ち合わせぬと感じたルター派の狂信家は、キリストが取税人や罪人と食事をともにするのを心得ていたように、世俗的な学識者をもてなすこつを非常によく心得ていた。たとえその人がどんな帽子に〔頭を〕突っ込んでいようとも、聡明な人なら誰でも気に入ったレッシングは、ゲッツェの学識に満足感を見いだした。啓蒙された中傷者たちは、ゲッツェが持っていたライン産のワインをこれにつけ加えるのであるが、〔ともあれ〕レッシングはそれに満足感を見いだした。レッシングは、お返しの表敬訪問をしなければならないという困惑に牧師団議長殿を陥れることなく、しばしば彼を訪問した。レッシングの知人や友人はすぐにこのことを聞きつけて、侮蔑気味にあるいは真面目に、このことで彼を冷やかそうとした。しかし彼があからさまに次のことを認めたとき、彼らはまったくびっくり仰天したのであった。すなわちレッシングは、自分がゲッツェの学識を評価しており、しかも彼の神学さえも評価していることを秘密にしなかった。インテリたちはそれを反抗心 (Widerspruchsgeist) と見なし、そして超インテリたちはあざ笑い (Spötterey) と見なした。¹²⁾

両者の友好的な関係は、レッシングがヴォルフエンビュッテルに移ってから暫くは続いていたようで、ゲッツェはレッシングに会うために、旅行の途中にヴォルフエンビュッテルに立ち寄りもしている (ただしそのときは、生憎レッシングはブラウンシュヴァイクに出かけており、二人は行き違いになった)。しかし、ある出来事を契機に、両者の間に亀裂が生じた。この起こりは、ゲッツェが自分の聖書研究の必要上から、レッシングに図書館情報の提供を申し出たことであつた。それに対してどういう理由からか、レッシングは回答しなかった¹³⁾。ゲッツェは、レッシングのこのような態度にひどく憤慨して、「あるよその土地の大きな図書館の有名な司書」¹⁴⁾の職務怠慢を公に非難した。このことを知ったレッシングは、ゲッツェに手紙で謝罪しなければと思ひながらも、つついそれを等閑^{なまごり}にしてしまった。レッシングはこの一件をそれほど深く気にとめていなかったが、ゲッツェのほうはどっこいそうはいかなかった¹⁵⁾。

レッシングとゲッツェの論争を考察する上で見逃すことができないもう一つの事柄は、論争が繰り広げられた当時の二人の境遇である。家庭人としてのゲッツェは、四人の子どもをもうけたが、そのうち二人は幼少時に、一人は長じて大学生になってから失ひ、そして一七七四年には、二十八年間連れ添った最愛の妻にも先立たれていた。また仕事の上でも、頑迷固陋な正統主義路線を主張するあまり同僚牧師たちとも軋轢を生じ、一七六〇年以來務めてきたハンブルク市の牧師団議長の職を、一七七〇年辞職せざるを得なくなり、かくして家庭的にも仕事の上でも孤立化の様相を深めていた¹⁶⁾。一方レッシングのほうは、「自由著述家」として自由気ままな生活と引き替えに得た、ヴォルフエンビュッテル図書館司書という安定した職であつたが、裕福というにはほど遠く、そのため美しき未亡人エーファ・ケーニヒと晴れて結ばれたのは¹⁷⁾、長い婚約の期間を経た後の、一七七六年十月のことであつた。二人の結婚生活は幸福に満ちたものであつたが、長くは続かなかつた。

エーファは翌年レッシングの子どもを身籠もり、一七七七年のクリスマス当日、男児トラウゴットを出産するが、その嬰兒は二十四時間後に亡くなり、母親のほうも難産ゆえに昏睡状態に陥り、そのまま翌一七七八年一月十日にあっけなくこの世を去ってしまった。ところが、ゲッツェがレッシングに対する攻撃を開始してきたのは、まさにレッシングがそのような悲しみのどん底に身を置いていたときであった¹⁸。最愛の妻と子どもを一挙に失う不幸に見舞われ、まさに打ちのめされていたレッシングにとって、ゲッツェの一撃はそれだけ余計に応えたに違いない。いまやレッシングは、渾身の力を振り絞って悲しみから立ち上がり、「異端審問官」ゲッツェの攻撃に対して敢然と立ち向かうのである。

さて、以上のような論争の発端と、二人の主役の人間関係と境遇を考慮に入れつつ、以下においてレッシングとゲッツェの間の論争を、紙幅の関係上、両者がいまだ比較的冷静であった論争開始直後の時期に絞って、考察してみようと思う。

2. ゲッツェの攻撃

論争の発端は、既に述べたように、レッシングがライマールスの断片を刊行したことであったが、ゲッツェはその断片の著者「無名氏」にではなく、「刊行者」たるレッシングに対して直接攻撃を仕掛けてきた。すなわち、彼が問題にしたのは、レッシングが『無名氏の断片』に付した「刊行者の反対命題」(Gegensätze des Herausgebers)であった。わけてもゲッツェがその神学的批判を集中したのは、レッシングの以下のような主張であり、慧眼にも彼はそこに「反対命題の基礎」¹⁹を看取したのであった。

「文字は霊ではない、そして聖書は宗教ではない。したがって、文字に対する、あるいは聖書に対する異議は、必ずしもまた霊に対する、あるいは宗教に対する異議ではない。なぜなら、聖書は明らかに宗教に属する以外のものをも含んでいるからである。それに、聖書がこのような〔宗教に属している〕以外のものにおいても、同じように不可謬でなければならないとするのは、単なる仮説にすぎない。それにまた、聖書が存在する以前に宗教は存在していた。福音書記者たちや使徒たちが書く以前に、キリスト教は存在していた。彼らのうちの最初の者が書く以前に、かなりの時間が経過していた。そして、正典全体ができあがる以前に、非常に長い時間が経過していた。それゆえ、このようにまだ多くのものがこれらの書物に依存しているとしても、宗教の真理全体がそれに基づいているということは不可能である。宗教がそのようにすでに広まり、すでに多くの魂をとらえ、そしてそれにもかかわらず、宗教が現代にまで伝わっていることについてまだ一文字も書かなかった時代があったとすれば、福音書記者たちや使徒たちが書いたすべてのものが再び失われ、しかも彼らによって教えられた宗教は存続するということが、また可能でなければならない。宗教は福音書記者たちや使徒たちが教えたがゆえに真なのではない。そうではなく、彼らはその宗教が真

なるがゆえに教えたのである。書かれた伝統は、宗教の内的真理から説明されなければならない。そしてすべての書かれた伝統は、宗教が内的真理をもたないのであれば、宗教に内的真理を与えることはできない。」²⁰⁾

レッシングのこのような主張に対して、ゲッツェは全面否定をもって対峙する。「わたしはこれら全部の箇所のなかに、それがここで有しているつながりにおいて、正しいと認めることができるような命題を一つも見いださない。刊行者殿は、なるほどそれらすべてを全くの公理 (Axiomen) として差し出しておられるが、しかしそれらのうちの若干のものは非常に強力な証明をなお必要としているし、それ以外のものは、そして大部分のものがそうなのであるが、誤りであると証明できるものである」²¹⁾。レッシングが文字、霊、聖書、宗教について語ることは、「曖昧で、不明確で、動揺した、間違った命題」²²⁾以外の何物でもない。このように扱き下ろした後、ゲッツェは「刊行者の反対命題」を具体的に逐一反駁しにかかる。以下に、その要点のみ列記しておこう。

(1) 文字と霊に関するレッシングの用語法は新約聖書的ではない。新約聖書においては、文字は律法を、霊は福音を表わしているのに対して、レッシングは文字によって聖書を、霊によって宗教を理解している。かくして、「文字は霊ではない、そして聖書は宗教ではない」というレッシングの命題に対して、「文字は霊であり、そして聖書は宗教である」²³⁾という命題が反定立されるべきである。

(2) 「文字は霊ではない、そして聖書は宗教ではない」という根本命題が誤りである以上、そこから導き出された「したがって、文字に対する、あるいは聖書に対する異議は、必ずしもまた霊に対する、あるいは宗教に対する異議ではない」という命題も、「真ではあり得ない」。文字と霊、聖書と宗教は「一つのもの」であるので、文字に対する異議は霊に対する異議であり、聖書に対する異議は宗教に対する異議でもある²⁴⁾。

(3) 「聖書は明らかに宗教に属する以外のものをも含んでいる」という命題であるが、ここには「二つの命題」が含まれている。第一に、「聖書は宗教に属するものを含んでいる」という命題であり、第二に、「聖書は宗教に属する以外のものを含んでいる」という命題である。ところが、第一の命題において、レッシングは「それに先立つ命題において否定したことを容認している」ことになり、これは矛盾である²⁵⁾。

(4) 「聖書がこのような〔宗教に属している〕以外のものにおいても、同じように不可謬でなければならないとするのは、単なる仮説にすぎない」という命題であるが、「否！これは仮説ではなく、異論の余地のない真理である」²⁶⁾。

(5) 「それにまた、聖書が存在する以前に宗教は存在していた」という命題も誤りである。なぜなら、「啓示が存在する以前に宗教は存在しなかった」からである。啓示と聖書の区別は、「単に偶然的な、あまり重要でない事柄に存している」。したがって、「それにまた、啓示が存在する以前に宗教は存在していた」という命題とほぼ同義のこの命題は、誤りである²⁷⁾。

(6)「福音書記者たちや使徒たちが書く以前に、キリスト教は存在していた。・・・そして、正典全体ができあがる以前に、非常に長い時間が経過していた」については、ある程度譲歩せざるを得ないとしても、「キリストと使徒たちが宣教する以前に、果たしてキリスト教はすでに存在していたであろうか?」、と問い返されるべきである²⁹。

(7)「それゆえ、このようにまだ多くのものがこれらの書物に依存しているとしても、宗教の真理全体がそれに基づいているということは不可能である」という命題に関しては、次のように言われるべきである。すなわち、キリスト教の真理はもちろんそれ自体に基づいており、神の特性並びに意志との一致に存している。だが、キリスト教の真理についてのわれわれの確信は、もっぱらこれらの書物のみに基づいている。もしこれらの書物が書かれず、そして現代にまで伝わっていなかったとしたら、キリストがなした業や教えはこの世に残っていたであろうか²⁹。

(8)「宗教がそのようにすでに広まり、・・・それにもかかわらず、宗教が・・・まだ一文字も書かなかった時代があったとすれば、福音書記者たちや使徒たちが書いたすべてのものが再び失われ、しかも彼らによって教えられた宗教は存続するということも、また可能でなければならない」という命題は、「明白な詭弁」(ein handgreifendes Sophisma)である。その誤りは、「まだ一文字も書かなかった」という部分を、「まだ一言も宣教しなかった」という風書き換えてみれば一目瞭然である。キリスト教はその起源を、福音書記者たちや使徒たちの書物にではなく、キリストと使徒たちの宣教に有している。それゆえ、キリスト教全体は、その直接的根拠として、キリストと使徒たちの教えと行ないに基づいている。だが、これらの教えと行ないは、福音書記者たちと使徒たちの書物からしか知り得ない。したがって、後者が失われるときには前者もまた失われざるを得ないであろう³⁰。

(9)「宗教は福音書記者たちや使徒たちが教えたがゆえに真なのではない。そうではなく、彼らはその宗教が真なるがゆえに教えたのである」という命題も、ナンセンスである。福音書記者たちと使徒たちは、聖霊によって語ったり書いたりした人々であるので、キリスト教は福音書記者たちと使徒たちが、あるいは本来的には、神ご自身が教えたがゆえに真なのである³¹。

(10)「書かれた伝統は、宗教の内的真理から説明されなければならない。そしてすべての書かれた伝統は、宗教が内的真理をもたないのであれば、宗教に内的真理を与えることはできない」という命題について言えば、キリスト教の内的真理と書かれた伝統を、レッシングのように異なった二つのものであるかのように対置することは、「空虚な言葉」である。「彼はキリスト教の内的真理の認識を、書かれた伝統、ないし福音書記者たちと使徒たちの書物、以外のどこから取り出そうと欲するのか?」³²。

かくして、ゲッツェの『暫定的反駁(その一)』は、次のような脅迫めいた一文をもって終わっている。

「もしわたしが、このような陰険な、かくも多くの魂にとって最高に危険な、そしてわれわれの

偉大なる救い主の名誉をかかも損なう論文の普及について、あの日に釈明を求められるとすれば、わたしは自らの死の瞬間に恐れおののくであろう。わたしは、刊行者殿が、彼が上司に任ぜられている図書館の貴重な文献のなかから、毒や躓きの種ではないよりよきものを、将来供給して下さることを願うものである」³³。

3. レッシングの反撃

以上のようなゲッツェの反駁に対して、レッシングは『公理』 *Axiomata* において真っ向から立ち向かい、その反論の一つひとつを取り上げて検証し、それらを順次論破することによって、あらためて「刊行者の反対命題」を擁護するのであるが、しかしレッシングはいきなりそのような全面対決に打って出たわけではない。むしろ最初は、相手の攻撃を巧みにかかわす作戦に訴えた。それが反ゲッツェ論争においてレッシングが放った第一矢としての『譬話』 *Eine Parabel* である。これは、文字通りの「譬話」の他に、「嘆願」^{パラベル}、「絶縁状」^{ビツテ} の三部から成り立っているが³⁴、「譬話」の部分にレッシングの神学思想の特質がよく反映されているので、まずはそれを全文訳出してみよう。

「ある大きな大きな国の賢くて活動的な王様が、その国の首都にまったく測りがたいほど広大で、まったく風変わりな建築様式の宮殿を築きました。その広大さといったら測りようがありませんでしたが、それは王様が自らの統治の助け手や道具として用いるすべてのものを、宮殿内の自分の周囲に集めたからでした。その建築様式は風変わりでした。というのも、それはあらゆる採択された規則と著しく矛盾していたからです。けれども、それは好感の持てるものでしたし、また理にかなってもしました。好感が持てたといいますのは、とりわけ簡素と巨大さが惹き起こす感嘆の念によってでありました。ときに奢侈や潤色は、そのような感嘆の念をなしで済ますというよりは、むしろそれを軽蔑するように思われます。理にかなってありましたのは、耐久性と快適性によってでありました。宮殿全体は、長い長い歳月を重ねた後も、棟梁が最後の手を加えたときと寸部^{たが}違わぬ清潔かつ完全な状態にありました。外側からは少々理解に苦しむところがありましたが、内側からはいたるところに光と整合性がありました。建築様式の専門家が主張することは、とりわけその外貌によって信憑性を傷つけられました。外側には、あちこちに分散したわずかな窓が、それも大小の、丸や四角の窓が、途切れ途切れにありました。しかしその代わりに、いろいろな形状^{かたち}と大きさの扉と門が、その分だけ沢山ありました。

どのようにしてそのようなわずかな窓から、そのような多くの部屋に十分な光が入ってくるのか、ひとにはわかりませんでした。種をあかせば、一番上の窓が光を上から採り入れる仕組みになっていたのですが、そんなことは思いも寄らぬことでした。各々の側に大きな正門が一つあるほうが、おそらくしっくり行ったことでしょうし、それこそ役に立ったことでしょうから、何のためにその

ようにいろいろな入り口が沢山必要なのか、ひとにはわかりませんでした。種をあかせば、小さな入り口が沢山あることによって、宮殿に呼び出された人が、誰でも最短の絶対に確実な道を辿って、御用向きの場所にまっすぐ到達できるからでしたが、そんなことは思いも寄らぬことでした。

そこで、専門家を自称する者たちの間でいろいろな論争が起きました。一般に、宮殿の内部をいろいろ見学する機会の最も少なかった者たちが、最も激しく論争を繰り広げました。そこにまた、一見したところ、その論争を非常に容易かつ手短なものにせざるを得ないと信じたくなるような、あるものがありました。しかしそれは、それこそ論争を最も紛糾させるものであり、それこそ論争のきわめてかたくなな継続に最も豊かな材料を提供するものだったのです。つまり、ひとは、宮殿を最初に建造した棟梁に由来するはずの、いくつかの異なった古い見取り図を手にかけていると思ったのです。ところが、これらの見取り図は現代では失われたも同然の言語と記号でもって記されておりました。

それゆえ、各自めいめい好き勝手にこれらの言葉と記号を解釈しました。それゆえ、各自めいめいこれらの古い見取り図から、思うがままの新しいものを組み立てました。いろいろな人々が、その新しいものに夢中になるあまり、単に自身がそれを信じきるばかりではなく、他の者たちにもそれを信じるように、あるときは説得し、あるときは強制することも、稀ではありませんでした。

ほんの少数の人々がこう言いました。『あなたがたの見取り図は、わたしたちに何の関わりがありません。これであろうと別のものであろうと、わたしたちにとってはみな同じことです。わたしたちは、最高に慈悲深い叡知が宮殿全体を満たしており、この宮殿からほかならない美と秩序と安寧とが全土に広がっているということを、各瞬間に経験するだけで十分なのです』。

これらの少数の人々は、しばしば冷遇されました！ というのは、彼らが気楽な気分で、特定の見取り図の一つを少しばかり事細かに調べたとき、彼らはこの見取り図を信じきっていた人々によって、宮殿そのものの放火殺人犯であると、大げさに言いふらされたからです。しかし、彼らはそんなことは気にとめませんでした。そして彼らはそのことによって、宮殿の内部で働いている人々の仲間となるのに最も相応しいものとなりました。そして彼らには、自分たちにとっては存在しない、いろいろな係争に容喙する時間もその気もありませんでした。

あるとき、見取り図に関する論争が、一件落ち着いたというよりはむしろ眠りについていたときであります。そのようなあるとき真夜中に、『火事だ！ 宮殿が火事だ！』という夜警の声が突然響きわたりました。すると何が起こったことでしょうか。各自、自分の寢床から跳び起きました。そして各自は、まるで宮殿ではなく自分の家で火事が起こったかのように、自分が所有していると思っている最も貴重なもの、つまりは自分の見取り図のところへ走って行きました。『あれだけは救い出そう！ 各自は思いました。宮殿は本来あっちで火の手が上がることはあり得ず、むしろこっちのはずだが！』

そして各々は自分の見取り図を手にもって大通りへ駆けて行きました。そしてそこで、宮殿に救

助のため急いで駆けつける代わりに、彼らはお互いに自分の見取り図の上で、おそらく宮殿のどこで火の手が上がっているかを示そうとしました。『ほら、お隣さん！ ここで火の手が上がっているのさ！ 火事を食い止めるにはここが一番さ！——それともむしろここかな、お隣さん。ここ！——二人とも何言ってるんだ！ 火の手はここで上がっているんだ！——もしそこで火の手が上がってるんだとしたら、何て急を要することだろうか。だが間違いなく火の手はここで上がっているんだ！——そこだって言い張る奴は、ここで火を消し止めりゃいい。俺はここでは消し止めないぞ。——俺はここじゃない！——俺はここじゃない！——』

このようななりやまぬ言い争いのせいで、実際、宮殿が焼け落ちることも可能だったことでしょう。もし本当にそこで火の手が上がっていたとすればです。しかし実際は、慌てふためいた夜警が、北極光を大火災と勘違いしたのであります。⁶⁵

以上が、「譬話」の全容であるが、あらためて解説するまでもなく、レッシングはここで神を「ある大きな大きな国の賢くて活動的な王様」に、宗教を「まったく測りがたいほど広大で、まったく風変わりな建築様式の宮殿」に例えている。宮殿（宗教）は外側からの観察者には理解しがたいが、その内側は「上からの光」（Licht von oben）に溢れており、その構造には「最高に慈悲深い叡知」が反映されて、内的一貫性と整合性が備わっている。ところが、「専門家を自称する者たち」（頭でっかちの神学者）は、宮殿（宗教）そのものや、宮殿から全土に広がっている「美と秩序と安寧」（聖霊の恵み）を経験するだけでは満足せず、宮殿の「建築様式」（神学理論）や「見取り図」（聖書）に不当な関心を寄せ、「現代では失われたも同然の言語と記号」（文字）の解釈をめぐる論争し合う。否、むしろ「宮殿の内部」（宗教の内的真理）を経験することが少ないからこそ、それだけ余計にそのような枝葉末節的な事柄をめぐる言い争うのである。

レッシング自身の立場は、「あなたがたの見取り図は、わたしたちに何の関わりがありません。これであろうと別のものであろうと、わたしたちにとってはみな同じことです。わたしたちは、最高に慈悲深い叡知が宮殿全体を満たしており、この宮殿からほかならない美と秩序と安寧とが全土に広がっているということを、各瞬間に経験するだけで十分なのです」という言葉によく集約されている。これは「刊行者の反対命題」における、「この人〔「無名氏」ことライマールス〕の仮説、説明、証明は、キリスト者に何の関わりがあるか？ キリスト者にとっては、キリスト教は何といても現に存在しており、彼はそれをかくも真実であると感じ、そこにおいて彼はかくも幸いであると感ずる。もし途中で麻痺をおこしている者が、電気火花の有益な衝撃を経験するなら、ノレとフランクリンのいずれが正しかろうと、あるいは二人とも間違っていようと、何の構うところがあるか？」⁶⁶、という主張と基本的に同一である。

しかしそれならば、なぜレッシングはそのようなキリスト教の有益な火花を経験することにとどまらず、「見取り図に関する論争」を惹き起こすようなライマールスの断片の出版に踏み切ったのであろうか。なぜ彼は、ゲッツェのような「夜警」が「大火災」と見間違っただけで大騒ぎするような物

騒な火種を、キリスト教世界に投げ込んだのであろうか。レッシングの答えはこうである。それはわたしが図書館司書 (Bibliothekar) だからである、と。レッシングは、牧師であるゲッツェと図書館司書である自分の職務上の違いを、「羊飼 (Schäfer) と「植物学者」 (Kräuterkenner) の違いに例える³⁷⁾。羊飼の一番の関心は、自分が世話をしている羊の身の安全であり、そして彼はそれに関係するかぎりでのみ、自分の牧場の植物にも関心をもっている。これに対して、植物学者は野や山を渡り歩いて植物を隈なく調査する。そして権威ある植物図鑑にもいまだ名前が記されていない、新しい植物を発見したときの喜びはどのようなものであろうか。「彼はこの新しい植物が有毒であるかないかということには無頓着である！」³⁸⁾。「われわれも同様です」、とレッシングは言う、「わたしは書籍という宝物の監視人です。・・・わたしが自分に委ねられている宝物のなかに、ひとに知られていないと思うものを見つけたとき、わたしはそれを届け出ます。真っ先にわれわれの文献目録に記載し、そしてそれがあれこれの間隙を埋め、あれこれの誤りを訂正するのに役立つとわかれば、次に少しずつ世間にも公表します。そしてその際わたしには、この人がそれを重要と宣言するか、それともあの人の方がそれを重要でないと言いかということ、それが一方の人の役に立つか、それとも他方の人の害になるかということは、まったくどうでもいいことです。有益であるとか有害であるといったことは、大きいとか小さいといったことと同様、まさしく相対的な概念です」³⁹⁾。かくしてレッシングは、ゲッツェによって「ひとの考えうる最悪のもの」⁴⁰⁾と決めつけられた『無名氏の断片』を自分が出版した行為を、「分別あるキリスト者たちが、もしできることなら、古代のアレクサンドリアや、カイサレイアや、コンスタンチノポリスの図書館司書たちに、ケルススや、フロントや、ポリフィリウスの書物に対してやって欲しかったと今日願うところのこと」⁴¹⁾をやったまでのことであるとして、むしろ正当化するのである。

このようなレッシングの弁明をどう評価するかは、読者諸氏の賢明な判断に委ねようと思うが、いずれにせよレッシングにとっては、ライマールスの遺稿の刊行は「真理探究の手段」⁴²⁾であった。ライマールスのなかに「宗教の真正なる論駁者の理想」にかぎりなく接近した人物を見いだした彼は、「宗教の真正の擁護者の理想にただもう全く同じくらい接近しているような人」⁴³⁾が現れて、これに徹底的な批判を加えてくれることを欲した。「わたしは、実に多くの人々が無名氏を検討し、実に多くの人々が彼を反駁できるようにするため、まさにそのために彼を明るみへ引き出したのである」⁴⁴⁾、というレッシングの言葉に嘘はないであろう。十八世紀になって表面化した正統主義と啓蒙主義、キリスト教的伝統と近代的自由精神の対立を、ネオロギー (Neologie) のように安易に調停することは、彼にとっては実際我慢ならぬことであった。「われわれを理性的なキリスト教徒にするという口実のもとに、はなはだ非理性的な哲学者にする」新流行の神学は、正統主義が「汚水」であるとすれば、それよりもはるかに不潔な「水肥」のようなものであった⁴⁵⁾。「そこから見れば、今日の決まり切った道よりも多少なりとも勝るものが見渡せる」ような「ひとつの高み」⁴⁶⁾に自分が立っていると信じたレッシングは、硬直化した正統主義や浅薄な啓蒙主義に対して

一石を投じ、批判と再批判という一種のソクラテスの弁証法によって、神学界並びに思想界を活性化・流動化しようと欲した。しかし、断片の刊行によってレッシングが提起しようとした「真理問題 (Wahrheitsfrage)」⁽⁴⁷⁾は、彼の対戦者としてリングに登場してきたのが、「精神の鍛錬のための解釈の遊技」⁽⁴⁸⁾の能力を持ち合わせぬ「要塞的メンタリティ」⁽⁴⁹⁾のゲッツェであったために、それとは次元を異にした社会的・政治的問題へとねじ曲げられてしまう。すなわち、啓示の真理性の問題を公開の場で討論することによって、われわれの啓示理解を一步前進せしめようと欲したレッシングに対して、ゲッツェはこの問題を極力一般大衆から遠ざけ、官憲 (Obrigkeit) に訴えて論争の早期決着を図ろうと企てた⁽⁵⁰⁾。かくしてここに「対話であって対話でない」(Ein Dialog und kein Dialog)⁽⁵¹⁾とレッシングが嘆くような不幸な事態が生じ、やがて二人の論争は、レッシングの意図に反して、揚げ足取りの泥仕合へと急転回していくのである。

注

- (1) 本研究においては、数種類のレッシング全集を使用しているが、引用に際しては以下のような略号を用いて示し、そのあとに巻数と頁数を併記することにする。
LM: *Gotthold Ephraim Lessings Sämtliche Schriften*, hrsg. v. K. Lachmann, 3. Aufl. besorgt durch F. Muncker, 23 Bde. (Leipzig: G. J. Göschen'sche Verlagshandlung, 1886-1924; Nachdruck, Berlin: Gruyter & Co., 1968).
W: *Lessings Werke*, hrsg. v. K. Wölfel, 3 Bde. (Frankfurt a. M.: Insel Verlag, 1967).
G: *Gotthold Ephraim Lessing Werke*, hrsg. v. H. G. Göpfert, 8 Bde. (München: Hanser, 1970-1979).
DK: *Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe*, hrsg. v. Wilfried Barner et al., 12 Bde. (Frankfurt a. M.: Deutscher Klassiker Verlag, 1985-) .
- (2) レッシングによってその一部が公刊され、大論争を惹き起こしたライマールスの遺稿は、一九七二年になってはじめてその全容が明らかにされた。Hermann Samuel Reimarus, *Apologie oder Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes*, hrsg. von Gerhard Alexander, 2 Bde. (Frankfurt a. M.: Insel Verlag, 1972).
- (3) まずハノーファーの高等学校長 J. D. シューマンが、『キリスト教の真理に対する証明の明証性について』という著作を著わして「無名氏」論駁を試みた。これに対してレッシングは、すかさず『霊と力の証明について』*Über den Beweis des Geistes und der Kraft*と『ヨハネの遺言』*Das Testament Johannis*をもって反撃した。そこでシューマンは『ブラウンシュヴァイクから私に向けられた霊と力の証明についての著者への返答』を公にしたが、レッシングはこれを無視。次にヴォルフエンビュッテルの教区監督 J. H. レスが『ヴォルフエンビュッテル論集第四輯においてなされた若干の抗議に対するイエス・キリストの復活の弁護』を著わすと、レッシングは『再答弁』*Eine Duplik*をもって応酬。するとレスが、『矛盾なきイエス・キリストの復活物語、再答弁を駁す』を著わすといった次第。その後、F. W. マシヨーや G. C. ジルバーシュラクといった人物が「無名氏」批判の論文を発表。
- (4) ゲッツェの人と思想については、以下の文献が参考になる。Heimo Reinitzer (Hrsg.), *Johann Melchior Goeze: 1717-1786, Vestigia Bibliae*, no. 8 (Hamburg: Friedrich Wittig Verlag, 1986); Heimo Reinitzer & Walter Sparr (Hrsg.), *Verspätete Orthodoxie: Über D. Johann Melchior Goeze*, Wolfenbütteler Forschungen, Bd. 45 (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1989); Gerhard Freund, *Theologie im Widerspruch: Die Lessing-Goeze-Kontroverse* (Stuttgart: W. Kohlhammer, 1989).
- (5) E. Schmidt (Hrsg.), *Goezes Streitschriften gegen Lessing* (Stuttgart: G. J. Göschen'schen Verlagshandlung, 1893), S. 10.

- (6) Ibid., S. 105.
- (7) LM 18, 287.
- (8) LM 18, 285.
- (9) LM 18, 319.
- (10) DK 9, 753.
- (11) LM 15, 259f.
- (12) Karl Lessing, *Gotthold Ephraim Lessings Leben*, Bd. I, S. 290-292, quoted in DK 9, 777.
- (13) ゲッツェはこの件に関連して、『レッシングの弱点』において、次のように述べている。「・・・そこでわたしはレッシング氏に手紙を書きました。・・・わたしは彼にこれらの目印をその地の見本と比べて、もし一致が見いだされれば、その紙の下に彼の名前とともに単純に Concordat という言葉を記して、すぐに送り返してくれるように頼みました。わたしは、わたしのこの頼みが間違いなく叶えられるものと期待していました。彼がこの地に滞在していた折、わたしは彼と個人的に知り合いになったことを喜びとしていましたし、彼は数回わたしを訪問するという敬意を表してくれ、わたしは彼との交際において本当に快いひとときを過ごしていましたので、なおさらのこと期待していました。・・・けれども、わたしの期待は無駄でした。まったく返事はありませんでした・・・」(*Goezes Streitschriften gegen Lessing*, S. 94)。
- (14) Ibid., S. 189.
- (15) Th. W. Danzel & G. L. Guhrauer, *Gotthold Ephraim Lessing: Sein Leben und seine Werke*, Bd. 2 (Berlin: Verlag von Theodor Hofmann, 1881), S. 434-435 参照。
- (16) Kopitzsch, "Politische Orthodoxy: Johann Melchior Goeze 1717-1786," in *Profile des neuzeitlichen Protestantismus*, hrsg. von Friedrich Wilhelm Graf, Bd. 1: Aufklärung-Idealismus-Vormärz (Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1990), P. 72-79; Bernhard Lohse, "Johann Melchior Goeze als Theologe des 18. Jahrhunderts," in *Johann Melchior Goeze: 1717-1786*, S. 43.
- (17) レッシングはハンブルク時代に絹商人エンゲルベルト・ケーニヒの家庭と親しくなった。そのケーニヒは一七七〇年一月、商用先のヴェネチアで急死することになるが、彼はこの旅に出るにあたって、途中まで見送ったレッシングに、自分の身に万一のことがあった場合には、後のことを頼むと言ったといわれる。そこでレッシングは未亡人エーファに力を貸すことになるが、やがて二人の間に愛情が芽生え、一七七一年九月に婚約する。しかし、レッシングは相変わらずの貧乏暮らしであったし、エーファも亡夫の遺産整理の仕事に手間取り、五年近くの高い婚約期間を持たざるを得なかった。
- (18) ゲッツェの『暫定的反駁(その一)』は、一七七七年十二月十七日に、その二は翌一七七八年一月三十日に出版された。生まれたばかりの息子を失い、いままた瀕死の状態の愛妻の枕元で寝ずの看病をするレッシングにとって、友人エシェンブルクから送られてきたゲッツェの『暫定的反駁』は、腹立たしいものであったに違いない。彼は皮肉たっぷりに次のように述べている。「ゲッツェの論文をお送り下さり有り難うございます。この資料は、実際のいまのわたしが憂さを晴らすことのできる唯一のものです」(LM 18, S. 261)。
- (19) *Goezes Streitschriften gegen Lessing*, S. 13.
- (20) G 7, 458.
- (21) *Goezes Streitschriften gegen Lessing*, S. 13.
- (22) Ibid., S. 14.
- (23) Ibid., S. 15.
- (24) Ibid., S. 15. このような主張を例証するために、ここでゲッツェはいかにも彼らしい「^{インスタンツ}訴訟手続き」をもちだす。「われわれは、その臣下たちがそれに従って振る舞うべき主君の意思を国の秩序(Landesordnung)と名づけようと思うが、しかし主君がその指令内容を起草せしめるところの書物は、国の憲法(Landesverfassung)と呼ばれるものである。さて、もしひとりの臣下が国の憲法からその名声を奪うために、それに異議を申し立て、そして裁判官に対して『国の憲法は国の秩序ではなく、したがって前者に対する異議申し立ては、後者に対する異議申し立てではありません』と言おうとし

- たとすれば、そのようなアンチテーゼは彼を正当化する力を有するであろうか。」(Ibid., S. 15-16.)
- (25) Ibid., S. 16.
- (26) Ibid., S. 16.
- (27) Ibid., S. 17-18.
- (28) Ibid., S. 18.
- (29) Ibid., S. 18-19.
- (30) Ibid., S. 19-21.
- (31) Ibid., S. 21.
- (32) Ibid., S. 21-22.
- (33) Ibid., S. 23.
- (34) レッシングは、ゲッツェの『暫定的反駁 (その一)』に対して、はじめ「譬話」と「嘆願」のみをもって応えようとしていたが、とかくするうちに敵の手から放たれた第二弾『暫定的反駁 (その二)』を読むに及んで、急遽「絶縁状」をしたためて、それらをひとつにして出版したのであった。
- (35) G 8, 118-120.
- (36) G 7, 458.
- (37) G 8, 120.
- (38) Ibid.
- (39) Ibid., 120-121.
- (40) *Goezes Streitschriften gegen Lessing*, S. 24.
- (41) Ibid., 121.
- (42) Albrecht Schöne, “In Sachen des Ungenannten: Lessing contra Goeze,” in *Text + Kritik* 26/27 (1975), S. 3. レッシングは、「論争は検証の精神を培い、先入見と見かけとを絶えざる動揺のうちにおいてきた。要するに、論争は粉飾された非真理が真理の位置に定着するのを妨げてきた」(G 6, 407.) と述べて、真理探究における論争の意義を高く評価している。
- (43) G 7, 460.
- (44) Ibid., 160.
- (45) LM 18, 101 (Brief an Karl Lessing vom 2. Februar 1774).
- (46) G 8, 489.
- (47) Lothar Steiger, “Die ‘gymnastische’ Wahrheitsfrage: Lessing und Goeze,” *Evangelische Theologie* 43 (1983): 430-445 参照。
- (48) Hermann Timm, “Eine theologische Tragikomödie. Lessings Neuinszenierung der Geistesgeschichte,” *Zeitschrift für Religions—und Geistesgeschichte* 34 (1982): 5.
- (49) William Boehart, *Politik und Religion: Studien zum Fragmentenstreit (Reimarus, Goeze, Lessing)* (Schwarzenbek: Verlag Dr. Rüdiger Martienss, 1988), S. 200.
- (50) ここにゲッツェが「政治的正統主義」(Politische Orthodoxie) と揶揄される所以がある (Kopitzsch, “Politische Orthodoxie: Johann Melchior Goeze 1717-1786” 参照)。Cf. *Goezes Streitschriften gegen Lessing*, S. 24; DK 9, 754, 789-791.
- (51) G 8, 150; Cf. Freund, *Theologie im Widerspruch*, S. 157-220.